

Mechtild Maria St. Goar (Karsch)

2018年8月15日に自宅から天上に旅立ちました。享年90歳

謹んで哀悼の意を表します。

故人の名前はメヒテルト マリア セイント・ゴアール（カルシュ）です。自宅の住所はアメリカ合衆国・テネシー州 チャタヌーガ・ヒクソン・パイク通りです。彼女の和名は星子です。彼女は、アメリカ人がメヒテルトと発音できず、メクテルトと呼ぶのが嫌で、戦後にミドルネームのマリアを名乗り、戦後の混乱時にあつては、ドイツ国籍を取得せず、アメリカ国籍になりました。

後述するように、再婚したドイツ人の夫はユダヤ人でしたが、アメリカ国籍を取得しました。

しかし、もともとドイツ人であった夫妻が自らの子供たちにドイツ語を教えなかったことだけは、思い残す例外的な失敗でしたと小生に洩らしていました。他には、数多くの生活体験をすることができて、言葉にも不自由することなく、この世には思い残すことはなく、人智学を胸に何時でも天に昇れると生前に言っていました。それにしても、小生との出会いは妹と出会いを通してでしたが、すべては父カルシュとの因縁としか思えない不思議なこととして繰り返し語っていました。

メヒテルトの父はドイツ人で、母エツメラはユダヤ人です。松江生まれ、松江育ちのメヒテルトは子供の頃は周囲からメヒテちゃん、妹はフリーちゃん（参考：Friederun Christa Karsch 和名：ヒデコ）とよばれていました。

毎年、夏季にはドイツ人の居住区の軽井沢の別荘で過ごしました。戦中は、東郷茂徳外相の娘のイセと親交がありました。ここでは、当時の白ロシア（現ベラルーシ）から亡命してきたマルゾフ夫人との親交も記録されています。

戦後には、彼女はシティバンクで働き、在日アメリカ軍属のホルトンと結婚しました。当時、両親はメヒテルトを単身で日本に放置することを望まなかったので、メヒテルトに結婚を勧め、自らはドイツに帰国しました。

当時、日独米の3カ国のすべてに関係のあったメヒテルトは、極東軍事裁判で3カ国語の通訳を務めました。そして、アメリカで離婚後にユダヤ人の Herbert St. Goar（ヘルベルト セイント ゴアール）と再婚し、Edward と Elisabeth を授かりました。

最近の5、6年は自力で歩けなくなりましたが、人智学関連のドイツ語-英語の翻訳は継続していました。食事は必ず、近くの息子と欠かさず摂っていましたが、体力は次第に衰え、死因は聞いていませんが、推定するに老衰と思われます

カルシュ博士は松江にとって大事な人であり、メヒテルトはカルシュ博士の最大の理解者で、多感な時代を松江で過ごしました、それこそ、人々との交流を通して日本を心より愛し、深く理解した人です。

拙著『四ツ手網の記憶』の内容を記述するのに、カルシュの旧生徒とともに、父の業績を飾ることなく、ありのままに語ってくれました。日本語の読みが困難であった彼女の自宅を訪問した時には、拙著『四ツ手網の記憶』の小生による読み上げを微笑みながら聞いてくれ、その時にも新たな深い思い出を付け加えてくれました。

ハンブルグで貴族の身分であった、彼女の夫ヘルベルトについて言及しますと、彼は戦中ナチスの迫害にあって、父の虐殺の後に実母とアメリカに亡命しました。戦時中は米兵としてヨーロッパのバルジ作戦に参戦しました。戦後処理では、ヒトラーの専属パイロットであって、同時にプロの写真家であったハンス・バウアーを自ら直接尋問して、ヒトラーの行動に関する重要な16ミリカラーフィルム16巻を押収したその人です。バウアーが花壇の下に隠匿していたフィルムは現在、ベルリンの博物館に厳重管理されています。小生が1973-1975年に留学していたエルランゲン・ニュルンベルグ大学でともに学んだペーター・レードレル教授(内科学)が偶然にバウアーを診察した経緯と因縁があります。ヘルベルトの約200年前の祖先のラツァルスはライン河の景勝地のザンクト・ゴアール(英語ではセイント・ゴアール)に居城をもち、町長を務めた富豪でした。これらのことがドイツで明らかになるとセイント・ゴアール夫妻は町を挙げての花火大会の中で歓迎されました。小生は、ライン河の流域にある先祖の居城の一角の小さな博物館で、フランス語で書かれた当時の書類を閲覧することができました。

カルシュは教育者、哲学者として自身の著書・論文および未発表の原稿を残しております。その良き理解者で思想を体現したのは娘のメヒテルトとフリーデルンでした。

メヒテルトの母エツメラには、眼科学で著名な医学者とショパンコンクール入賞者で日本の音楽家との関係が深いピアニストのアクセンフェルト父娘(ユダヤ人の伯父と従妹)がおります。

改めて小生に微笑みかける故人との縁(えにし)の深さを思いながら、ひたすら冥福を祈っています。

若松 秀俊

メヒティルト、セイントゴアール、エツメラは、これまでの拙著および新聞など、ほぼすべてにわたって、日本人の耳に馴染むメヒテルト、セイントゴア、エンメラとしました。とくに、メヒテルト自身はいつもメヒテルトと必ず表記し、これをいつも正式な扱いとしてきました。

メヒテルトには日独米にわたって一切の学歴がない、僅かに1940年頃1年ほど、ドイツ学園に通った経歴しかありません。すべてを両親の教えと独学で学者になった人です。

メヒテルトには、下記のようにシュタイナや人智学関連の翻訳と著書があります。

メヒテルトの研究者としての業績（翻訳および著書）です。

- 1) The foundation Stone Mediation: A key to the Christian Mysteries Oct.1 2006
Sergei O. Prokofieff and Maria St.Goar
- 2) Sait Paul: Kife, Epistles and Teaching Jan 15 2006
Emil Bock and Maria St.Goar
- 3) Genesis: Creation and Patriarchs April 1 1983
Emil Bock and Maria St.Goar Hardcover
- 4) Why Become a Member of the School of Spiritual Sciences (Paperback) 2013
Sergei O. Prokofieff and Maria St.Goar
- 5) Education as Preventive Medicine : A Salutgenic Approach (German Edition) Dec.2002
Michaela Glockler and Maria St.Goar Paperback
- 6) The Time-Sequence and Spiritual Foundations of Threefoldings- 1998
Rudolf Steiner and Maria St.Goar
- 7) Moses: From the Mysteries of Egypt to the Judges of Israel Aug.31 2011
Emil Bock and Maria St.Goar
- 8) Mankind At the Threshold – The Apocalyptic Language of This Century 1983
Johannes Tautz and Maria St.Goar
- 9) Time of Decision June 2000
Friedrich Hiebel and Maria St.Goar
- 10) The Origins of Natural Science(CW326) June 1 1885
Rudolf Steiner and Maria St.Goar
- 11) Health and Illness, Vol2:Lectures to the Workmen Oct. 15 1983
Rudolf Steiner and Maria St.Goar
- 12) Anthroposophy and the Philosophy of Freedom: June 2009
Anthroposophy and its Method of Cognition
Maria St.Goar
- 13) The Guardian of the Threshold and Philosophy of Freedom:
On the Relationship of Thephylosophy of Freedom to the Fifth Gospel April 30 2011
Sergey Prokfiev and Maria St.Goar